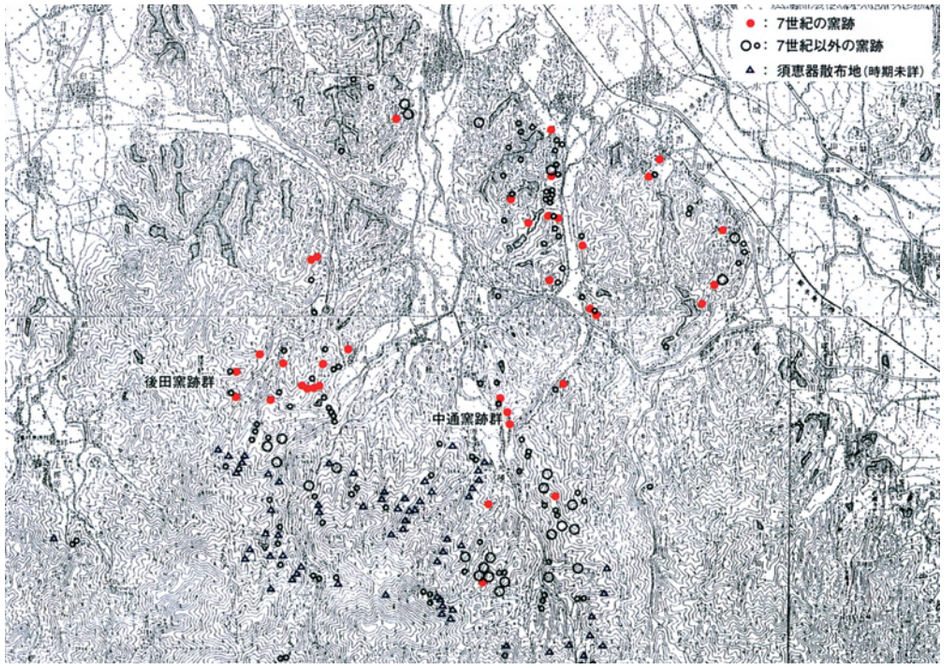
生産の拡大と転換（７世紀）

窯の操業は盛んに行われます。特に前半代は窯の規模が最も大きく、数も増加し、最初のピークを迎えます。中頃になると一時窯の数が減少しますが、後半になると再び増加し、次第に山深い所に窯を作るようになります。

７世紀前半は、多孔式煙道窯で６世紀と同じくつまみがなく底が丸い蓋杯（杯H）のほか、椀・高杯・瓻などが焼かれます。陶棺が焼かれたのはこの頃ですが、野添遺跡７次２号窯跡出土陶棺の脚の多さは特徴的です。棺蓋は畿内系と考えられる技術で作られていますが、脚の作り方はそれとは異なる在地的なものです。一方、蓋杯ではつまみ付きのもの（杯G）が作られるようになります。

中頃になると、直立煙道窯が登場します。これは煙道が奥壁に接してほぼ直立するように立ち上がるもので、以後後半にかけて次第に主流となります。多孔式煙道窯は次第に少なくなり、全長10mを超えるような大形の窯も少なくなります。後半になると全長5m以下の小形の窯跡が出現し、大形品と小形品の焼き分けがおこなわれている可能性があります。

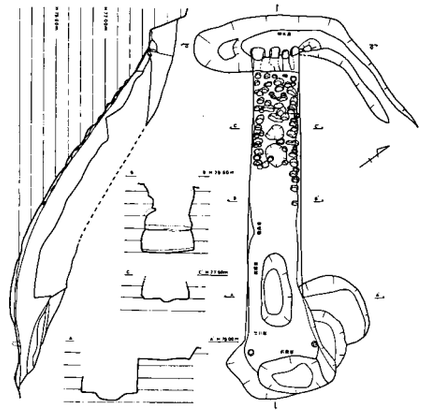
後半になると、つまみ付きで高台付の蓋杯（杯B）が主流となり、高杯などの形態も変化します。また、筑前国内（現在の福岡県西北部）では牛頸須恵器窯跡のみで須恵器生産がおこなわれ、筑前一国の須恵器生産を牛頸が担ったようです。新しい器種の出現と窯構造の変化や小形化、一国一窯体制への変化は期を一にしており、牛頸須恵器窯跡の大きな転換点と考えられます。



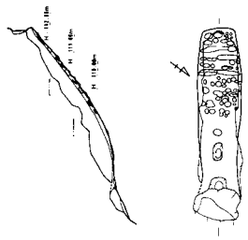
７世紀の窯跡分布図

中通Ａ－２号窯跡（多孔式煙道窯）

後田60－Ⅰ号窯跡（直立煙道窯）



中通Ａ－２号窯跡実測図（Ｓ＝1/300）



後田60－Ⅰ号窯跡
実測図（Ｓ＝1/300）

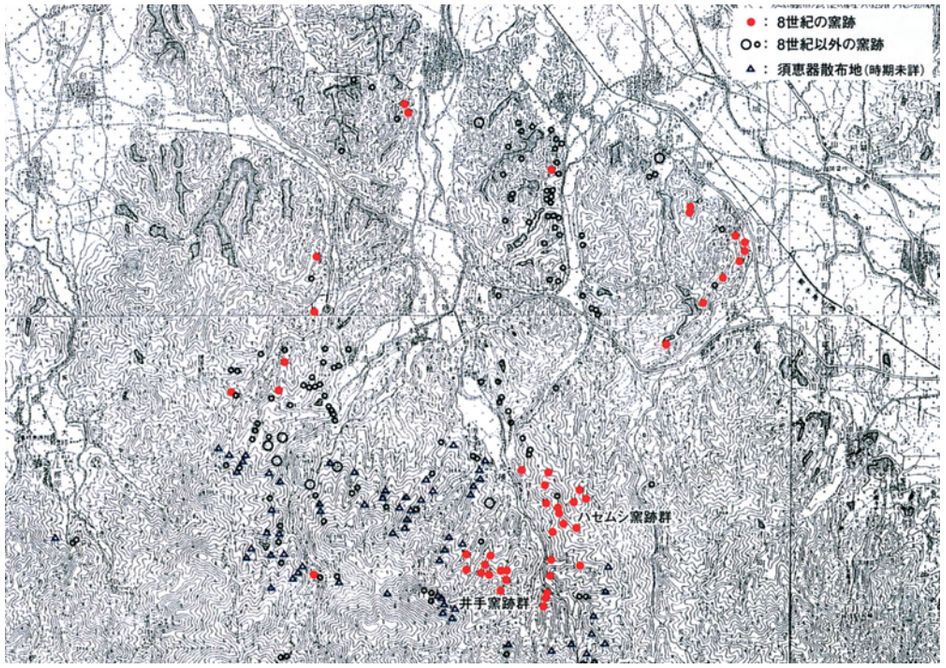
７世紀の須恵器

西海道一の窯場へ（８世紀）

牛頸須恵器窯跡の操業期間の中で、最も多くの窯が造られ、生産される器種も最も豊富な時期です。前代に比べてさらに山奥へ操業範囲を広げている支群もあり、全体で盛んに操業が行われています。中には規模の大きな窯と小さな窯が並ぶように造られるものがあり、大きな窯では甕などの大形品、小さな窯では蓋杯などの小形品を焼くという、製品の焼き分けを行っています。

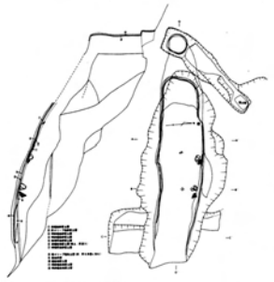
窯はすべて直立煙道窯です。大形の窯は全長７～８ｍ程度で、７世紀に比べて規模が小さくなります。また小形の窯は全長３～４ｍのものを中心とし、数は大形のものよりはるかに多くなります。むしろ小形の窯を中心に生産が行われているようです。ハセムシ６地区から出土した須恵器のうち、大形品である甕はわずかに２％、その他は蓋杯など食器を中心とする小形品で占められていました。小形の窯ではこうした食器類が大量に焼かれ、大宰府をはじめ西海道各国（現在の九州地方）へ運ばれていたようです。牛頸須恵器窯跡は、８世紀前半の西海道で最も大規模な生産を行っていた窯場でした。

８世紀後半になるとさらに窯の規模は小さくなり、小形の窯がほとんどとなります。最も小さな窯では、全長1.8ｍの極小のものもあります。この時期には甕を焼く窯はなくなり、古墳時代以来、須恵器生産の主要品目であった甕は生産されていないようです。



８世紀の窯跡分布図

ハセムシ窯跡群18地区



ハセムシ18-Ⅰ号窯跡
実測図（Ｓ＝1/300）

ハセムシ18-Ⅱ号窯跡
実測図（Ｓ＝1/300）

奈良時代の窯の操業

7世紀後半以降になると全長5ｍ以下の小形の直立煙道窯が増え、蓋杯・皿などをはじめとする小形食器類を中心に焼かれます。

８世紀の須恵器